

## 「沖縄平和の旅3日間」

2015年10月21日

日本ジャーナリスト会議（JCJ）主催の全国交流集会「沖縄平和の旅3日間」が行われた。東京、神奈川、兵庫、広島、福岡からジャーナリズム関係者や学者たちが集まり、私は九条の会の5名の友人を誘って参加した。私はパソコンの「お気に入り」に「琉球新報」と「沖縄タイムズ」を入れて読んでいたが、沖縄のジャーナリストから直接聞くことができることを期待した。大変刺激的な集会で、沖縄の現状に触れることができた。

到着後、「琉球新報」と「沖縄タイムズ」の4人の記者の話を聞いた。彼らは事実を報道し、誤解を解くことに懸命な努力をしていることを強調した。沖縄の諸々の選挙において、辺野古新基地反対の民意が表され、それに基づく翁長県知事の言葉と行動が支持されている現状を自信と誇りを持って語る言葉が印象的だった。「沖縄振興予算」によって経済が保たれているような報道がなされているが、事実は、基地が撤去された方が雇用も広がり、経済活動は活性化すると繰り返された。午後、沖縄戦の明暗を分けた激戦地の嘉数高台公園から「普天間基地」を見た。宜野湾市の真ん中にある基地で、オスプレイが何機も並んでいた。「世界一危険な基地」と言ったのはラムズフェルド元国防長官で、高性能な移転基地建設を煽る言葉であった訳である。辺野古のテント村に行き、綺麗な海を見ながら話を聞いた。その中で「あなたのお友達の百田さん（『琉球新報』と『沖縄タイムズ』を潰せと言った人）」という言葉には驚いた。安倍政権による「安保関連法案」の強行採決を許した本土に対して、深い怒りを率直に表されたのであろう。シュワブゲート前で座り込みをしている地元の方々から、連日の激しい抗議行動の様子を聞いた。強大な力に抗して、小さいがへこたれない闘いを持続する忍耐力には敬服する。夜は、「やんばる学びの森」という美しい自然に囲まれた宿で夕食をとり、参加者の交流をした。

二日目はまず、沖縄本島の北、米軍・北部訓練所のある東村に行った。海に近い高江地区に新たに海兵隊のヘリパッドを作ろうとしている。地元民は数百人だそうだが、24時間体制で座り込んで監視し、抗議活動をしている。新ヘリパッド建設阻止のために果敢な闘いをしていることに、ただ頭が下がった。午後は、「聞け、『沖縄の民意（こえ）』— 県外国外へ辺野古をどう伝えるか —」というタイトルで「2015年マスコミ労協反戦ティーチン」に参加した。130人ほどの全国から来たマスコミ関係者と市民の熱気溢れる集会であった。4人のパネリストが発題をした。沖縄の現実を伝えることがメディアの責任であり、そのために努力していることを多角的に話された。沖縄の民意が無視され、また正確に伝わっていないことへの不満といら立ちがある。様々な圧力に屈せず、現場をしっかりと踏まえ、人権の視点から報道する責任を共有しようというティーチンであった。夜は、例によって、会食しながらの交流会である。

三日目は、識名壕（ガマ）を見学し、「平和の礎」を訪ねた。国籍、軍人、民間人の区別なく亡くなられた全ての人々の氏名が刻まれている。膨大な数である。参加したNTさんは従兄の名前を見出し喜ばれた。「沖縄平和の旅3日間」は、ここで終わった。

沖縄の声を直接聞くことができた。彼らは穏やかで、心優しい人々であった。控えめな言葉から、二度と戦争をしない、平和をひたすら希求する思いを聞いた。それは、沖縄戦の悲惨な体験から生まれたものであることを痛切に感じた。また、本土に対し、沖縄の声を本気で聞いているかという問いかけに、応えていない自分を恥ずかしく思わされた。構造的な差別の中に置かれている沖縄の苦悶は日本国民の問題である。